

論文要旨

学位論文題目：現代カイロで女性学校教員として生きること
—日常実践からの中東ジェンダー論再考—

氏名：鳥山純子

本研究の目的は、エジプトの首都カイロで、現在女性が教員として生きることがどのような意味を持ち、どのように生きられているのかを、彼女たちの日常実践に着目しながら明らかにすることである。その際、エジプト学校教員を生きる女性たちを、仕事と家庭を両立する女性、高学歴保持者でありながら労働市場参入が困難な女性、国民の再生産を担うエージェント、もしくは、低賃金労働者や社会構造の犠牲者といった社会的類型として論じるのではなく、対象とした女性学校教員たちの生きられた経験から、女性学校教員として生きる彼女たちの生について考察することを試みた。

女性学校教員は、現代のエジプトにおいて、様々なアクターにより女性の社会進出のあるべき姿の代表として論じられてきた。なお本研究で女性学校教員と呼ぶのは、学校で教職に従事する女性のことである。女性学校教員は、エジプト政府が打ち出す国家発展ビジョンに一つの模範として登場する他、モダニストとイスラーム主義者の双方により、女性役割に適合した職業とされてきた。実際、2000年代初頭以降の統計では、初等教育課程の教員の約8割は女性で占められている。これは、女性の就労率が2割前後を低迷するエジプトでは驚異的な数字である。また、女性学校教員は、エジプトの女性を論じる様々な研究で取り上げられてきた。とりわけ、女性に与えられる母役割と、教員に求められる次世代育成という責務の重なりや、比較的短い勤務時間が家事や育児との両立を可能にすることから、ジェンダー規範に抵触せず女性が従事できる専門職として高い関心が向けられてきた。近年では、学校教員の女性比の高さと給与水準の低さから、学校教員という職業の「女性化」を論じる研究も現れている。

その一方で、エジプトでは近年、学校教員の在り方が大きな社会問題として報道されている。新聞などでは、生徒に対する教員の暴力使用、試験問題の売買、教員による放課後の家庭教師行為とそれに付随する教室での依怙最負など、学校教育に絡んだ問題が連日取り上げられている。そこでは、熾烈化する点数主義や公立学校の学習環境の劣化と並び、十分な教育スキルを持たない学校教員の存在も大きな問題として指摘されてきた。政府においても、こうした問題への対処として、教員トレーニングによる教員のレベルアップや、学校教員給与水準の引き上げによる優秀な人材の確保が急務とされている。

このように、エジプトのメディア、政府、さらには人々の日常会話のレベルで、学校教員は社会全体の在り方や社会問題などと密接に結び付けられて論じられてきたにもかかわらず／だからこそ、エジプトの女性学校教員は、ジェンダー規範を順守し、家族規範を順守し、国家政策を体現する従順な女性という記号とされ、その具体的な姿には、ほとんど関心が向けられてこなかった。この傾向は、ジェンダー学、社会学、教育学、経済学といった学術研究においても同様である

対象とする女性学校教員の生を明らかにするため、本研究では、第一に、現代エジプトに生きる3人の女性学校教員の民族誌を通じ、中東地域において主体的に生きる具体的な女性の生の在り方を明らかにした。具体的には、カイロの私立A校で出会った3人の女性学校教員たち(2名の初等教育課程教員、1名の初等・中等教育一貫校校長)について、彼女たちがどのような資源や戦術を用い、どのような「自己」を生きていたのか、そしてその結果を本人はどのように受け止めていたのかを民族誌として詳細に記述した。民族誌で用いたのは、主として筆者が現地調査で収集したデータである。現地調査として、2004年9月～2013年3月のうち計26か月間にわたり現地調査を行い、2007年8月から2008年2月の6か月間は、私立A校において、実際に学校教員として勤務しながら、A校に勤務する女性学校教員たちを対象にした参与観察と聞き取りを行った。加えて、先行研究、ならびにエジプトの教育関連法や政府の人口統計、貿易統計などを適宜参照した。民族誌の記述および分析において重点をおいたのは、彼女たちが生きる集団や社会内部の脈絡のなかで、対象とした女性たちの日常実践について個別的に意味を探究することである。その際、自己成型という概念を援用することで、一人の人間として包括的に捉える視点を保持しながら、個別具体的な事象について議論を深めることを試みた。

第二に、これらの知見を基に、エジプトにおける女性理解のツールとして、中東の女性研究におけるジェンダー論の意義を批判的に検討した。そこでは、民族誌で得た知見を、これまでの「家父長制」構造や、男女間の保護従属関係といった議論を中心に行われてきた中東のジェンダー論の流れに位置づけ、自文化中心主義でも、「システムとしてのジェンダー」を尊重する文化相対主義にも絡めとられることなく、その人物の脈絡において考察するためにジェンダー論に必要なことを検討し、これまでに行われてきた中東ジェンダー研究における可能性と限界、課題について明らかにした。